

第4卷【冬の章】

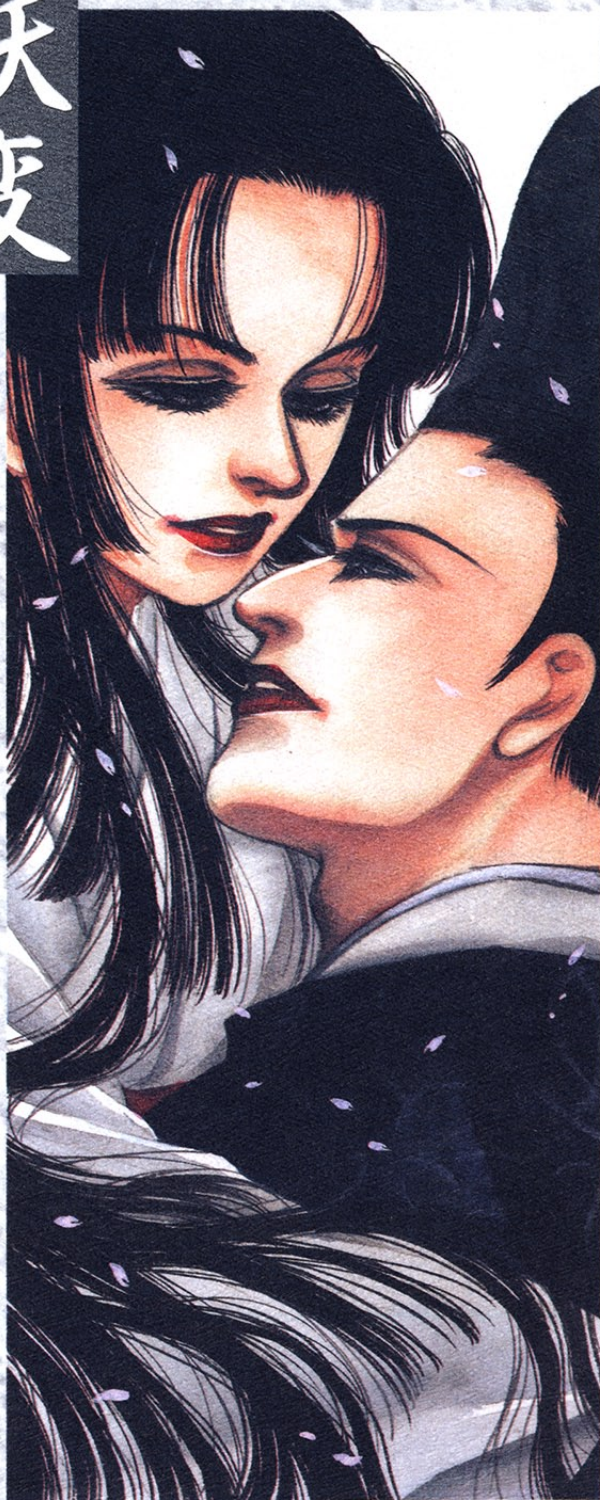
寺館和子

妖変

げんじ

ものがたり

源氏物語









妖変

源氏物語

第4卷【冬の章】

寺館和子

妖変  
源氏物語  
第4卷  
目次

【玉鬘】その二の巻  
— 二

【女三宮】の巻  
— 六九

【紫の上】の巻  
— 一二五

なんという美しい方なのでしょう  
れいぜいてい  
上様——冷泉帝は

げんじ おとど  
お顔立ちは源氏の大臣に  
そっくりですが  
帝としての威厳を持つその姿は  
とても美しく立派なこと

あの方の側にいられるなら…

いえ そんな  
たいそうなことを

でも…私

でも……

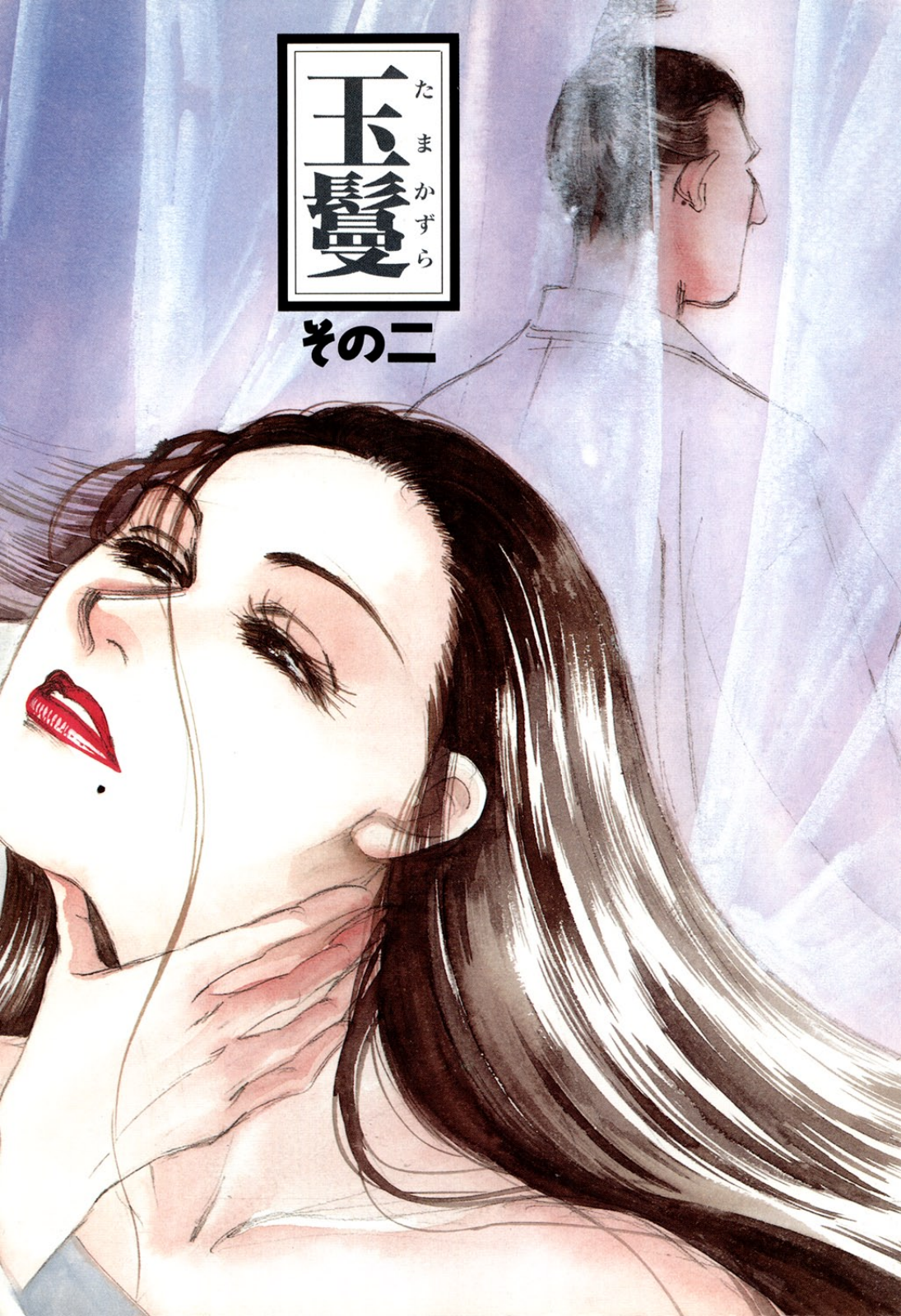


その二



たま  
かづら  
玉鬘

その二





栄華を極めゆく男の陰で  
運命の流れの中に漂う女と  
あがく女。





# 原典のあらすじ【玉鬘】その二

内大臣（頭中將）ないだいじん（うづのちゆうしやう）と亡き夕顔の娘である玉鬘を、養女として六条院に引きとった源氏の君は、かつて愛し合った夕顔に似た玉鬘への恋心を抑えきれなくなっていた。そこで、玉鬘を表むきは宮仕えをさせて、人に気づかれないよう自分のものにしようと考えた。

源氏の君は、玉鬘の装着の式での腰結役を實の父親である内大臣に依頼しようとして、内大臣と久々の再会を果たす。

装着の式も盛大に執り行われ、冷泉帝の行幸を見物して以来、宮仕えを望み始めていた玉鬘だったが、姉妹である弘徽殿女御や、同じ源氏の君の養女である秋好中宮（梅壺）あきこのなかつくさ（うめつぼ）と帝の寵愛を競うことになると思ひのだった。

そんな中、玉鬘の求婚者達は、玉鬘の宮仕えを前にして、必死に侍女達にとりつぎを頼んでいた。鬚黒もそのひとりである。鬚黒は帝の信頼も厚く、東宮の後見にもなろうかという人物だが、北の方（式部卿宮）の長女で、紫の上の姉が物の怪に憑かれていた。源氏の君は鬚黒と玉鬘の結婚を好ましく思っていなかったが、鬚黒は強引に玉鬘を自分のものにしてしまったのだった。



たまがら  
玉髪の君を  
宮中に：

ですか？

※裳着＝女子の成人式。



どちらにせよ  
早いうちに  
※  
裳着の式を  
挙げねば：

それに：



ああ  
※  
尚侍として  
宮仕えさせたら  
どうかと  
常々思っていた  
んだが

先日の行幸で  
姫も帝の姿を  
拝見しその気にな  
ったらしい

※尚侍＝帝に仕える女性。





あなたも  
女房達の話で  
気づいてるかも  
しれないが…

玉鬘の君は  
私の娘では  
なく、実は  
内大臣の娘  
なのだ

由あって  
私がここまで  
世話したもの  
だが…



……  
知って  
おりました

内大臣の  
娘だとい  
う噂も…

それに  
本当の親子と  
見えない  
そぶりも…



玉鬘の君を  
宮中へ…

帝にはすでに  
梅壺の中宮や  
他にも女御達が  
いるというのに

何を考えて  
いるのかしら  
あの人は



宮仕えに  
出すなら  
そのことも  
はつきりさせ  
ないと…

内大臣には  
裳着の式の  
腰結の役を  
頼もうと思うんだ

それは…  
ふたりとも  
喜ぶこと  
でしょう

玉鬘の君は  
実の娘ではない…

だったら  
尚更に…

本当の親子では  
ないそぶりも



源氏の君の  
ことだわ

彼女を  
尚侍として  
宮仕えさせる  
のは

結局は  
誰とも結婚  
させず  
自分のものに  
する…気

そんな  
こと…!!

三條の  
大宮様から  
お手紙です

内大臣殿





源氏の君が  
大宮のところへ？

それで私に  
話があると  
いうのか



先日から度々  
都合を聞いてきた  
のを大宮の病気に  
かこつけて  
逃げてきたのに

奴め 大宮を  
味方につけ  
たな

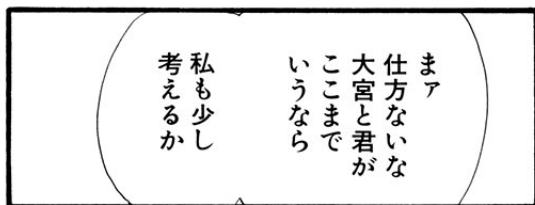
おおかた  
夕霧と  
くもいのかり  
雲居雁の  
ことだ

夕霧は最近はその気を全く  
見せないが…



まア  
仕方ないな  
大宮と君が  
ここまで  
いうなら

私も少し  
考えるか



どうするん  
ですか  
父上

雲居雁を  
早く嫁に  
やりたい  
くせに

とか  
いつて

いりし  
話を  
聞いてやる



110  
サリ

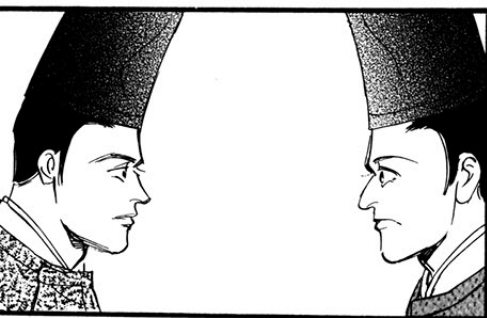
3



内大臣殿



源氏の君か



1319



久しぶりですね  
このように  
ふたりで差しむかう  
ことは

ああ  
何年ぶり  
だろうなア



懐かしい  
ですね

本当に…

そっだ  
この方とは  
よき敵であり  
よき友人だつた

飲もう  
源氏の君

須磨に流された時も  
周りを気にせず  
見舞いに来てくれ  
たのだつた…

若かりし頃の  
ふたりの無茶を  
思い出して

大宮様

よかった  
こと

お互い年をとり  
身分や権力が  
ついてくると  
昔のようには  
いかなかった

本当です  
昔のことを  
忘れたり  
してないのに

そういえば  
昔

雨の宿直の夜に  
女の品定め  
話をしたこと  
覚えてますか





源氏の君…!?

本当…か?

申し訳  
ございません

しいては  
来年の二月に  
裳着の式を  
しようと思ひ

内大臣に…



姫…

私の…



それでは

裳着の式に

ああ…

そうか

源氏の君が  
引きとつた姫は  
あの撫子の姫…

私の娘か



柏木達の話だと  
かなりの美しい姫と  
噂らしいし

当然だ  
あの女性と私の  
娘だぞ

よくぞ  
源氏の君も  
今まで手を出さず  
“娘”として育てて  
くれたことよ

父上  
うれしそう  
ですね

何か  
いい話が？

夕霧と  
雲居雁の  
話でしたか？

あ…

忘れてた

まいいか

あちらが  
しなかつたのだ  
私からするわけに  
いかないぞ

内大臣に  
本当のことを？

私のこと…  
ですか？



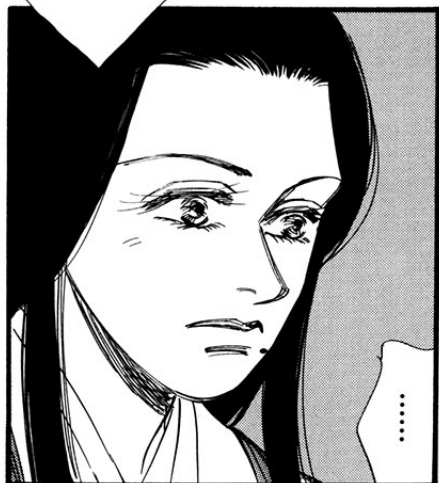
姫君  
よかった  
ですね

やっと  
本当の父上に  
お会いでき  
ますよ



とても  
喜んでいま  
したよ  
涙ぐんで  
まで……

こうなると  
対面できる  
裳着の式が  
楽しみです



……



夕霧も 柏木が  
傷つかぬよう  
諭しておあげ

そうだ  
内大臣からも  
そのうち話を  
されるだろうが



という

玉鬘の君は  
私の姉ではなく

柏木の実姉  
だったのですか？



……  
そう……  
ですか

だからあの日  
父上はあんな真似を……

娘ではない  
玉鬘の君だから



他の女性にも……  
なんて

それでは  
まるで父と  
同じだ

中宮から  
贈り物が

東の院の  
ひたちのみや  
常陸宮からも……

三条の大宮様  
から  
お使いです



でも実の姉では  
ないなら

私にだって  
あの美しい方と……



は



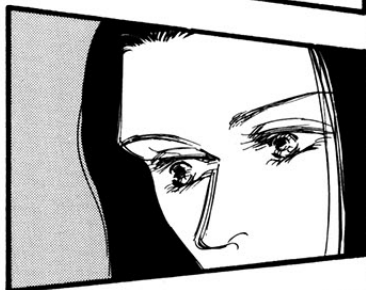
なんて  
ことを


私には  
雲居雁が  
いるのに

はるるん

はるるん







今日  
この日まで  
あなたを娘として  
会えなかったとは

情けない…やら  
恨めしい…やら



源氏の君の姫の  
裳着の式は  
立派にすんだ  
らしい

内大臣が  
腰結の役を  
されて…

なんでもあの姫は  
内大臣の実の娘  
だというじや  
ないか

それを  
源氏の君が  
今まで  
育てあげられて

姫君は尚侍として  
宮中にあがるらしい

気が気じゃないのは  
求婚している  
男達か



内大臣…

お待ち  
下さい

内大臣殿

これは鬚黒の…  
いや…右大将殿

私のお話を  
聞いて下さい

内大臣殿

源氏の君の  
ところの  
玉鬘の君

内大臣の娘と  
聞きました

私はずっと  
求婚して  
参りました

